

多い分裂細胞がみられることから Polyploid 細胞の分裂の可能性が考えられる。

質 問：八 木 舎 四（医学部第二生理）

1. 生の標本でも測定できるのか。
2. 図の縦軸・横軸は？

回 答：名 和 橙黄雄（口解2）

1. 本装置は固定染色した標本を使用するので生の標本は使用できない。

2. 縦軸は細胞数を表わしているので1個1個の細胞核を計測することになる。

演題3 健康者および臨床材料から分離したコアグラ
ーゼ陰性ブドウ球菌の性状について

○平田 佳子, 本田 寿子, 田近 志保子
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

Staphylococcus epidermidis に代表されるコアグラ
ーゼ陰性ブドウ球菌は opportunistic infection の
原因菌の1つとしてあげられているがその病原性につ
いては不明な点が多い。今回著者らは Staphylococcus
epidermidis が産生するエラスターゼ活性に注目し、
本菌種の病原性を歯周疾患との関係から検討したので
報告する。供試菌株：コアグラーゼ陰性ブドウ球菌は
歯周疾患々者の歯肉浸出液150例中50例からの133株、
口腔内化膿巣（主として歯周炎）33例中24例からの67
株、健康者の顔面および肘関節屈側の皮膚面 113例中
108例からの 484株、健康な幼稚園児の咽頭ぬぐい液
211例中 116例らの 195株、小児科外来患者咽頭ぬぐ
い液からの40株、尿路感染症患者の尿からの72株、合
計 991株を分離した。また上記材料中から 178株の
Staph. aureus を分離し対称とした。1. ブドウ球
菌の分離：各種材料からのコアグラーゼ陰性ブドウ
球菌と Staph. aureus の分布をみると健康な皮膚
では 108例中64例（59.3%）にコアグラーゼ球菌の
みが分離され、6例は Staph. aureus のみ、残りの
38例は Staph. aureus とコアグラーゼ陰性ブドウ球
菌の混在であった。健康者の咽頭ぬぐい液ではコア
グラーゼ陰性ブドウ球菌のみ分離されたものは 116例中
79例（68.1%）、Staph. aureus のみが14例、残りの
23例は上記2菌種の混在であった。これに反し、濃汁
では Staph. aureus が分離されたのは24例中1例だ
けで23例（95.8%）はコアグラーゼ陰性ブドウ球菌の

みであった。歯肉浸出液でも50例全部（100%）がコ
アグラーゼ陰性ブドウ球菌のみ検出された。2. ブド
ウ球菌のエラスターゼ活性：Staph. aureus のエラ
スターゼ活性は 178株中11株（6.1%）に検出されただ
けであるが、コアグラーゼ陰性ブドウ球菌では 991株
中 530株（53.5%）に認められた。このエラスターゼ
活性保有率は歯周疾患々者の濃汁から分離された株で
最も高く70.1%、歯肉浸出液からの分離株では60.2%
であった。歯肉浸出液中のエラスターゼ活性が歯周疾
患と相関するという報告などもあり、今回の実験でコ
アグラーゼ陰性ブドウ球菌が歯周組織病変に関与して
いる可能性も示唆された。

質 問：片 山 剛（口衛）

1) 炎症が進行した結果、歯肉溝浸出液、膿汁中に
coagulase (-)の staphylo 数が増加するの否か。

2) 唾液中の同菌種の検出頻度はどれ程か。

回 答：平 田 佳 子（口微）

1) 炎症の程度と Staph. epidermidis の検出率に
ついては、分離される菌の定量を行っていないのでな
んともいえないが、炎症のある歯肉溝浸出液中から分
離される Staph. epidermidis の elastase 活性保有
率が高いことや炎症の程度が強くなると歯肉溝浸出液
中の elastase 活性が増すという報告などから考え合
わせると炎症の進展に Staph. epidermidis の産生す
る elastase 活性が一役かっているものと思われる。

2) 今回唾液中から Staph. epidermidis を分離し
ていないが前にやった場合には同菌種は高率に分離さ
れるようである。

演題4 後頭・椎骨動脈の1例

○都 筑 文 男, 藤 村 朗, 横 須 賀 均
大 沢 得 二, 伊 藤 一 三, 野 坂 洋 一 郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

脳側副循環路の1つである後頭・椎骨動脈吻合は、
Gray など多くの解剖学書に筋枝間吻合として記載さ
れている。また一方臨床的には、脳血管造影の際、頸
動脈、椎骨動脈、又は鎖骨下動脈などの閉塞性疾患を
併う場合にこの吻合を観察した数多く報告されている。
今回、昭和54年度歯学部解剖学実習において左側
後頭・椎骨動脈の直接吻合枝に遭遇したのでここに報
告する。

〔症例〕 70才、日本人女性、死因、敗血症。

この吻合と仙骨部及び右背部の褥創を除いては、特記すべき事項はない。左後頭動脈(口径約0.7mm)は、顔面動脈とはほぼ同じ高さで外頸動脈より分枝し、通常の走行後、上頭斜筋上で、後頭下三角内の左椎骨動脈(約2.8mm)よりの吻合枝(約1.3mm)が下頭斜筋側に凸弯しながら後頭動脈と吻合していた。後頭動脈の直径は、吻合前約0.4mmで、吻合枝は約1.5mm、吻合後約1.6mmとなっていた。また、外頸動脈の分枝部では約0.7mmであった。吻合枝の長さは約3.4cmであった。このようにあかかも後頭動脈が椎骨動脈より分枝し、本来の後頭動脈がそれに吻合しているかのように見える。一方右側の後頭動脈、椎骨動脈はともに一般的な走行を示していた。

〔考察〕 発生学的に後頭動脈と椎骨動脈はその起原をまったく異にし、その間の直接吻合枝についての解釈にはまだ異論も多い。しかし、この直接吻合枝が、疾患あるいは奇形を合併する症例の他に正常の脳血管造影や剖検などにより発見、報告されていることから、発生学的に何らかの血管が残遺したものと考えられる。しかし本症例の場合、もし左後頭動脈に血管を狭窄させるような後天的要因があったならば、右後頭動脈との吻合枝がこれを補い、椎骨動脈との吻合枝がこれまで太くなり後頭動脈の血流を補うことはないと考えられる。これらのことを総合して考えると、本症例の直接吻合枝は、先天的な血管の残遺によるものではないかと考えられるが、既往歴がくわしく判明しないことから後天的な要因も否定しえない。

座長 村井 繁夫

演題5 30%笑気吸入鎮静法と Diazepam による静脈内鎮静法の比較検討について

○中里 滋樹, 水間 謙三, 池田 英俊
山口 一成, 藤岡 幸雄, 涌沢 玲児*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学医学部麻酔学講座*

歯科治療は外科治療を初めとして疼痛不快感を伴う治療が多く、歯科治療に対し恐怖感を有している患者が少なくない。前回我々は Diazepam を用いた静脈内鎮静法について報告したが、今回症例を更に増やし、あわせて笑気による吸入鎮静法も試み若干の知見を得たので比較検討し報告した。対象は昭和54年10

月より昭和55年6月にかけて岩手医科大学歯学部第一口腔外科及び沢内病院歯科を受診した14才~64才の22名である。静脈内鎮静法を受けた患者は14名で、処置内容は抜歯4例、嚢胞摘出4例、難抜歯2例その他顎関節脱臼徒手の整復、歯牙結紮除去、印象採得などである。吸入鎮静法を受けた患者は8名で処置内容は抜歯6例、嚢胞摘出1例、歯槽骨整形1例である。これらの症例に鎮静法を応用したが、その要因をみると静脈内鎮静法では既往歴に neurogenic 様の shock を併発した歯科恐怖9例、手術侵襲大3例、徒手の整復困難1例、嘔吐反射大1例であった。一方吸入鎮静法は歯科恐怖3例、狭心症を併う心疾患2例、高血圧1例、脳硬塞を併う脳疾患1例であった。次に静脈内鎮静法と吸入鎮静法を5項目について比較検討した。施術時間は静脈内では28分、吸入では14分で、術中異常所見では静脈内の場合疼痛が4例と最も多く、吸入では手足のしびれ感2例、疼痛が1例であった。手術終了後帰宅許可までの時間を比較すると、静脈内の場合123分で吸入では27分であった。次に鎮静効果をみると、静脈内では Excellent 8例、Good 5例、Poor 1例で、吸入の場合全例 Excellent であった。術中術後の呼吸循環の変化を比較すると両鎮静法とも安定した経過をたどったが、静脈内鎮静法では収縮期圧、呼吸数、脈拍とも開始時と比較し減少した。

質 問: 黒田 政文(三沢市)

まだ7例しか症例をもっていないのですが、私共の臨床で Horizon (10mg) を使用して1例に静脈炎でなく血管痛と不安感を訴えたものがあります。これに対する予防法があればご教示頂きたいのです。

回 答: 中里 滋樹(口外1)

我々の Diazepam 静脈内鎮静法には血管痛を訴えた症例はありませんでしたが、この血管痛は副作用の一つにあげられております。この原因は Diazepam の溶媒が疼痛を起こすとされており、従って大きな静脈路を確保し、希釈された状態でゆっくり流すと血管痛は起こらないと考えます。

演題6 W-P-W症候群患者の麻酔経験

○水間 謙三, 池田 英俊, 山口 一成
中里 滋樹, 藤岡 幸雄, 涌沢 玲児*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学医学部麻酔学講座*